第 369 号
平成25年３月１日(金)発行

# 下商物語（その三）

## 最初の卒業式について

教諭　林　俊行

本校初の卒業式は、記録によると明治二十年十月十八日（創立記念日）に、盛大に西之端校舎で開催されました。

栄えある初代の卒業生は何と五名（三年前に入学した生徒は三十六名で、最終卒業試験に臨んだ者が六名で、さらにその内一名が落第）でした。当時は進級規定が大変厳しく（下商物語その一を参照）ストレートに進級して卒業することは相当難関でした。

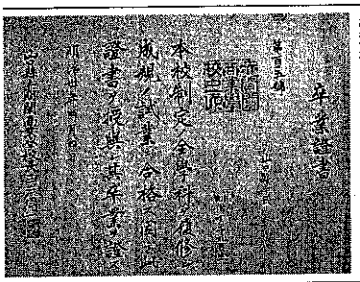
初の卒業式は、午前九時に始まりおよそ次のような次第で挙行されました。（1）卒業証書授与（2）山口県知事祝辞（3）赤間関区長祝辞（4）校長式辞（菅川清校長）（5）卒業生総代答辞（6）英語講師による講話（7）卒業生による祝辞朗読（英文）（8）在校生送辞　などといった内容でした。臨席された来賓数は実に八十三名で、原保太郎県知事や県会議員、佐波・美祢郡長、高洲素介赤間関区長、区内各町総代、本校創立委員などの方々であったとのことです。

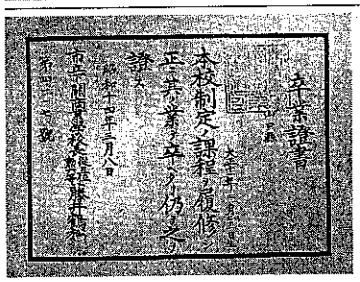
この最初の卒業生五名のことを筆者は俗に「下商ファイブ」と名づけておりますが、参考までに進路先は、二名が三井物産（東京）に就職され、他には高等商業学校進学や研究生として本校残留後に本校教員になられたようです。

ところで、第一期生の皆さんが本校でどのような学習をされたか当時の記録をもとに紹介してみますと次のように（〇数字は時間数）なります。第一年（前期・後期とも　修身①簿記⑥読書⑥英語⑤算術⑥習字③地理①図画②合計三十時間）、第二年（前期・後期　修身①・①簿記⑥・⑥読書④・①英語⑤・⑥算術⑥・⑥商律②・③経済③・④実習③・③合計三十時間）、第三年（前期　修身①簿記⑥読書①英語⑥算術⑤商律③経済⑤実習③合計三十時間）といった内容ですが、読書（よみかき）というのはただ単に本を読むのではなく現在のイメージで言うと論文作成の時間で、商律は、現在の経済活動と法の授業をもっと深化したものでした。特筆すべきは、全十二科目のうち最も時間数の多いのは、簿記（総計三十時間）・算術（総計二十九時間）・英語（総計二十七時間）・読書（総計十八時間）が配分されており、これからの科目に相当力点が置かれていたようです。また、実習は二年次より三時間ずつ実地での演習（現在のインターンシップのような時間）が課せられており、教育課程表に明記されていませんが、毎日三十分程度の体操の時間がすべての年次に課せられていたようです。また、当時使用されていた教科書については、簿記・英語などのように神戸商業講習所と共通したレベルの高いものを使用していたようです。

興味深いところでは、当時の試験規則によると、試験の実施時期や終了後作成される成績一覧表などは、県庁への届け出と報告が義務付けられており、各学期試験の合格者には、「第〇級卒業候事」と明記した卒業証書（現在の学年終了証書）が授与されていました。本校の第一回証書授与式は開校の翌年（明治十八年）三月十四日に挙行されましたが、当時の本校は五期制（二年半）で卒業する制度になっていました。最短で卒業することは棘の道であったようです。

参考までに今回で最後の証書番号は二万八千三百六十七号となります。





※写真は昔の卒業証書